

コロナ禍を超えて

川口ひろ子

ウィルス飛散の少ない弦楽器奏者のみによる15人編成のコンサートを聴いた。出演は「アンサンブル・アール・ヴィヴァン」。コロナ禍で演奏の機会がなくなった若手の為に、指揮者佐藤俊太郎とヴァイオリ奏者神谷美千子の呼びかけで昨秋結成されたばかりの小さな合奏集団だ。演奏曲目はモーツァルトの「レクイエム」と交響曲41番「ジュピター」。いずれも2009年程前にペーター・リヒテンタールによって弦楽器のみに再創造された曲だ。

現代と違ってCDなど録音装置を持たなかった当時の人々は、これら宗教曲やオペラなど大編成の曲の、管楽器、打楽器、合唱の一部分を、弦楽器に編曲された演奏で聴いた。親戚、友人達を招き、自宅でコンサートなどを開いて楽しんだのであろう。

開演だ。ヴェテランと新人の混成チームの音は、アマチュアオーケストラ風のヒラヒラとした響きで、これには閉口した。しかし聴き続けると徐々に耳が慣れてくるから不思議だ。大曲「レクイエム」は、全員必死の努力も空しく、中間部の変化の少ない長丁場がもたれてしまいバラバラ、残念であった。一方テンポよく進んだ「ジュピター」は、活気に溢れ、同じ奏者のものとは思えない素晴らしい出来栄であった。また、管楽器や打楽器の音を弦楽器で表現する各パートのトップ奏者の辣腕には驚いた。例えば低音の管楽器・ファゴットの音をチェロとコントラバスの代替えで演奏していたが、「そっくり」と言うより「そのもの」と言う感じで、思わずマスクの中で「ブラーボ！」を叫んだ。

いたずらにコロナ禍を嘆くのではなく、これを上達のチャンスと捉え、埋もれていた楽譜を探し出しこの夜のコンサートを実現させた佐藤、神谷両氏の行動力に拍手を送りたい。名人芸披露の各パートのトップ奏者たちは若手の指導役まで買って出たという。コロナ禍を超えて前進しようという皆さんの熱意が伝わるコンサート、来年秋には是非努力の成果を披露してほしい。